戦闘機人TYPE1st

リュウジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
戦闘機人ＴＹＰＥ１ｓｔ

【Ｎコード】
Ｎ６９１０Ｚ

【作者名】
リュウジ

【あらすじ】
小学４年生ながらも少なからず自分の人生を投げ出していた斬空（きそら）無人（むひと）。
いきなり重症をおった彼を助けた科学者がいた

人間じゃなくなった日（前書き）

初めましてリュウジです。気長に小説を更新していきたいと思います（暗に亀更新）

こんな作者と小説ですがよろしくお願いします

人間じゃなくなった日

先生「そんじゃ来週になりたい職業、夢の作文書くから考えとけよー」

生徒「「はーい」」

無『……。』

小学４年生も終わりに近づいた冬下がり

人当たりが良くて評判の担任が将来――つまり未来に自分がなりたい、したいことの作文を考えておけと言った

大抵の生徒は小学生らしく憧れや希望を少なからず持っていて、早速明るい将来のことについてどんなことを書こうか曇りない笑顔で話し合っている。

そんな中で一人だけ浮いた子供がいた。その生徒の名前は斬空（きそら）無（む）人（ひと）といい、小学４年生とは思えないほど自分に出来ないことのほうが出来ることより多いことを知っていた

『……はっ、将来かぁ』

そんな未来のことを今聞かれても困るんだよな

そもそも仮に将来の夢が決まっていたとしてもなんでわざわざ作文

にして周りに知らせなきゃならないんだ

「無人、お前さ、将来何になりたいんだ？俺は警察官になって悪い奴を倒してやるんだ！」

『……まだ決まってない。光多、警察官は逮捕が仕事であって倒すのはちょっと違うぞ？』

光多がなりたいのは警察官じゃなくて正義のヒーローじゃないのか？でも満面の笑みで夢を語る光多を見ると自然と晴れた気分になってくる

光多「なら俺と一緒に警察官目指そう！んで逮捕しまくろうぜ」

『あー……誘ってくれるのは嬉しいんだけど、やっぱりまだ考えたいんだ。だからごめんな』

光多「ちぇー……まぁ、無理ゆう気もないけど」

『ははっありがとな。じゃあ俺帰るよ』

口を尖んがらせる光多におもわず苦笑してしまった

光多「じゃあな～！」

俺は帰りながらどんな嘘で作文を書こうか考えていた

『……警察官はないな』

光多には悪いけど警察は綺麗な職業じゃない。いや、警察官だけじゃなくて大半の職業は裏で汚職する人間や自由がきかず、ロボットのような変わらない毎日を送るだけだと思う。
今でさえ変わらない毎日に退屈しているのに

俺はそんなのは嫌だ。せめて自分のやりたいようにしたい

決まらない思考を一旦切り上げて俺は憂鬱で空を見上げた

『はぁ？』

え？なんだあｒ

『…がっ…い、……！！？？！？』

何が起こった！？

『あ、あぁあああぁあ！！！！！』

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛いイタイイイタイイイタイイイタイイイタイイイタイ！！！！！

全身を血みどろにしても痛みがこなかった無人の体はやっと追いつ

いた痛覚が容赦なく無人に生き地獄を味合わせる
無人はいくら大人びていても小学生４年生だ。大人でさえ耐え切れない傷と痛みに抵抗できるはずもなかった

ふいに、ぼやけていた視界が影で真っ暗になった

『……？』

……なんで目を開けているのにいきなり暗くなったんだ？死ぬ寸前だから？

『……はっ、なんだ俺……結構余裕だな、俺はまだ自分が正常な思考を保てていることに笑った。普通は痛みで発狂するんじゃないか？死ぬ時に冷静になるっていうのは本当なんだなと思いながら自分を嘲笑う

「おや、生きているとは。しかしこれは酷い姿だね」

影が喋った？いや、喋っているのは人間で間違いない。しかも今の俺を見て冷静ということは一般の人間じゃないな

「君に問おう。君は生きたいかい？最も、生きたいなら人間じゃなくなるがね」

『……生きたい』

……最後に聞こえたのは高笑いだった

半分機械になった日

『……なにこれ？』

眼が覚めた瞬間に違和感があった

何か機械のような物でほぼ全身が包まれてる？

……分かることは結局昨日俺が死ななかったことだけか

「おや、眼が覚めたようだね。私の最新の技術を用いて作った体なんだがなにか不備はあるかい？」

『えっと、不備はないです。若干の違和感と頭に響く機械音が少し気になるだけです』

本当によく出来てる体だと思う

「ふむ、左目は見えているようだね」

『左目？』

「あぁ、気づいていなかったか。左目は負傷が大き過ぎて機械に替えさせてもらったよ。どうだい？素晴らしい視力とクリアな視界だろう！？」

『わあっ！興奮しないで下さいよ！』

それにしても……まぁ、興奮しているのも怖いんだけど、それ以上に左目が違和感なさすぎて気づかなかった

どこの技術だろう？少なくとも日本じゃ有り得ない

意識してみると左目からキュイィンっていう機械の音がした。多分中でモノアイやらカメラやらが動いているんだと思ｒ

「しかもただ視力が良くなっただけではない！！」

『またですか！！』

「その左目には戦闘機人システムの一つ、ＩＳ（インヒューレントスキル）が備わっているのだよ！！」

『な、なんだってー！』

いや、雰囲気でだいたいの意味は分かるけど専門用語ばかりいわれたら困る。ちゃんとした意味が分からない

「……そんなあからさまに棒読みで驚かれると流石に傷付くんだがね。私も熱くなっていたようだ、まず君には現状を知らせないといけないというのに」

『助かります』

ジェイル「私の名前はジェイル・スカリエッティというまぁ、科学者だよ」

マッドサイエンティストですね、分かります

『俺は斬空　無人です。ジェイさんって呼んでいいですか？』

ジェイル「構わないよ。さて、無人君。無人君は晴れて名前と同じように人では無くなったんだが『余計なおせわです』失礼。なら君がもう人間に混じって生活出来ないことは分かるかい？」

『分かりますよ。もし俺の正体がばれたら化け物扱いされるかジェイさんのようなマッドな人に一生研究されて改造される地獄を味わうだけでしょう？』

ジェイル「……私はマッドではないんだがね『マッド中のマッドですよ』……まぁ、確かに人には違法とよばれる研究ばかりしているがね。それより、君は頭が良いみたいだね。こんな状況になっても臨機応変にかつ柔軟に思考出来る者はなかなかいない。端的に言うと私の口から説明する必要はないのだよ」

『なんでですか？』

ジェイル「君のブレイン補助データチップ、君のもう一つの脳のような物に必要なデータを入れておいたからだよ。ふむ、物は試しだ、データを引き出すように思考してみるといい」

『……それはまた凄い技術ですね。脳と機械がリンクしているってことですか？』

ジェイル「ふはははは！実に助かるよ！説明の手間が省けていい。もっと詳しくいうなら君の脳から発信するマイクロ脳波と電気信号がデータチップに受信、もしくはデータチップから発信するのだよ」

へーますます凄い＜ピー、システムオールグリーン。確認中……、以上なし。今からデータの引き出しをします＞

『うわぁっ！！俺の肩？から機械音がでた！？』

ジェイル「君の肩には簡単にいうとアダプターがついていてね、そこからコードを繋げたりするんだが、必然的に肩からデータ分析の状況が発声されるようになっているのだよ。どうだい？必要なデータは引き出せたかね？」

『えぇ、全部分かりました。俺は戦闘機人とよばれるプロジェクトFの次の段階のプロジェクトで初めて人間から作られた成功体、戦闘機人ＴＹＰＥ１ｓｔ。ジェイさんは次元管理局？に顎で使われているってとこですか』

ジェイさんも苦労しているんだな。結局違法だけど

ジェイル「合っているよ。まあ、すぐに抜け出すんだがね。それにしても驚かないのかい？」

『驚いてますよ。ただ俺の機械の部分が正常に動いているだけです』

ジェイル「それは良かった。さて、無人君には私の助手をしてもらいたいんだがね。君のチェックもしなければならないし、機材の揃ったこの部屋を自分の部屋にしてくれたまえ」

『分かりました』

暫くは退屈しなさそうだな。……世間からどれだけ生命の冒涜だとか悪だとか言われることをするとしても

Ｎｏ．１が出来るまでの日

『それでジェイさん。俺はどうやって手伝えばいいんですか？まさか俺とジェイさんだけで研究開発するわけじゃないですよね？』

ジェイル「勿論、私の他に各専門分野のエキスパートの研究員がいるよ」

『良かった。ここでジェイさんが二人でやるとかいいだしたら夜逃げするとこですよ』

ジェイル「安心したまえ。私がチーフをしているが部下も優秀だ。ただ困ったことに上のスポンサーが馬鹿ばかりなのだがね」

あ～それは分かる。データの情報でも管理局は俺達正義（笑）の集まりだったしな

『例えばどんなのですか？』

ジェイル「まぁ、待ちたまえ。管理局の無能さを知らしめるにはとびっきりのネタがあってね。
無人君、何で君が死んだか分かるかい？」

あれ？そういえば分からないな……上を見上げたら閃光？が光ったように見えただけだもんな

ジェイさんが凄いにやにやしてるのけど俺ってそんなにあほな死に方だったのか？

『そういえば気になりますね。俺の死因って一体なんなんですか？』

ジェイル「君の死因……それは！！」

『……ごくっ』

ジェイル「私を上空から撃とうとした管理局魔導師の誤射なのだよ！！」

『……はぁ？え、ちょ、俺の耳が壊れたんですかね？もう一回いって下さい』

＜ピー、確認中……聴覚、鼓膜、その他の機能に問題なし。正常です＞

ちょ、うるさいな俺の肩

『あれですか？ジェイさんを上空からあほみたいに遠距離で狙った屑魔導師のとばっちりをうけて俺死んだんですか？しかも非殺傷設定もなしですか』

ジェイル「全くもってあさっての方向に放たれた一撃だったが多分間違いないと思うよ」

『俺、今から管理局壊してきていいですか？つーかジェイさんも俺の死因の一部じゃねーか』

ジェイル「安心したまえ無人君。仇は私が討った！！」

『ドヤ顔で親指立てるな元凶！』

ジェイル「それは八つ当たりというものぐはぁっ！！」

俺の戦闘機人版右ストレートがジェイさんの右頬を捉えた

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

『…………さて、スッキリしたところで話しを戻しましょうか』

ジェイル「ちょっと待ってくれないかね。メガネが壊れたから予備をかけたいのだよ」

『なんか自然に壊れましたもんね、メガネ』

ジェイル「いや、壊したのは君なんだが……」

『それで、結局どんな戦闘機人を造ればいいんです？』

ジェイさんがなんかいってるけど知らん

造るにしても用途があるはずだからな。例えば量産できる有能な人員が欲しいとか、初期スペックがチートで更に成長していくとか

ジェイル「ふむ、研究コンセプトは＜高位魔導師を倒せる性能を持ったサイボーグ＞だよ」

『成る程、なら魔力ＡＡは必要ですね。擬似リンカーコアは作れる

んですか？』

ジェイル「ふむ、その点は問題ないのだがね、問題は機械の性能に生身の肉体が耐えられないことだよ」

『走った瞬間に皮膚がちぎれるってことですか。……怖いですね、俺その光景絶対見たくないですよ』

ジェイル「そうならないために今案を出しているのだよ。今から私の研究班のところに行くから着いてきたまえ」

『えー……ジェイさんみたいなマッドが沢山いるとこなんて行きたくないですよ。一人でいって下さい』

寄ってたかって解体されるなんて嫌すぎる

ジェイル「……君も言葉に遠慮しなくなってきたね。万が一無人君をバラそうとする輩がいたら私がそいつをバラしてあげるよ」

『ジェイさん……』

初めてジェイがかっこよく見えた。俺をそんなに大事に思ってくれていたなんて……

ジェイル「無人君は私の大事な作品だからね」

『大事の意味が違う！！』

ジェイル「あぁっ、暴力はやめたまえ！君の腕力は戦闘機人になって大分強ぶはっ！！」

俺の右拳が二度目の唸りをあげた

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

『いやーそれにしても廊下長いですねジェイさん』

さっきからずっと二人の足音が廊下にかつーんかつーんと響いてる

ジェイル「まさかたった３０分の間にメガネが二個も壊れるとはね……もうメガネじゃなくてコンタクトにするよ」

『物は大事にしないといけませんよ？全く、いい大人のくせに………』

ジェイル「だから壊したのは君なのだがね…………もうすぐ着くよ」

あぁ、あの扉か

＜ＩＤカード確認しました＞

なんかいかにも厳重そうな扉を開けた

ジェイル「ふはははは！！見たまえよ無人君、ようこそ、私の城（研究室）へ！！」

『ちょ、ジェイさんうるさいですよ』

そんな大声だしたら他の研究員に迷惑が……

研究員「「……」」

『うわぁ、仮にもチーフが来たのに見向きもしませんよ』

こんな痛い人が来たのに無視なんてただ者じゃないな

ジェイル「仮ではないなのだがね。科学者とはそんなものなのだよ」

ジェイル・ス仮エッティ……あんまよくないな

研究員「ドクター、後ろの少年はどうしたんです？モルモット（実験動物）ですか？」

さらりと恐いことといったよこの研究員！？

ジェイル「ふ、ふはははははは！！諸君！驚きたまえ！！ここにいる斬空　無人君は昨日、人間から戦闘機人になったのだよ！！」

研究員「「なん……だと！！！」」

『ノリいいなあんたら』

研究員「つまり過程は違えどそこの子供がこの戦闘機人の完成形なのか……」

女性研究員「いや、それだけじゃないわよ！
無人君はもう成長しない……つまり！！」

『つまり？』

女性研究員「つまりエターナルショタなのよ！！」

女性研究員「「はうっ！！！」」

『いや、はうっじゃねーよ！！』

そういえば俺もう成長しないのか……一生１０歳児体型とか泣ける

女性研究員「素晴らしい……素晴らし過ぎるわ。永遠に愛でることの出来る男の子……私はこれを求めてたのよ！」

『あんたら戦闘機人の研究してたんだよな！？』

つーか目つき恐いんだけど！？

ジェイル「あー諸君、無人君を愛でるのは後にしてくれたまえ『一生愛でんでいいわ！』無人君は高速移動などの戦闘は出来ない。やはり生身だと限界があるのだよ」

研究員「「……」」

今更キリッとした顔になっても第一印象のせいで台なしだな

しかも全員が机に肘ついてシ〇ジ君のお父さんみたいだからシュールすぎる

ジェイル「私たちは一つの細胞から素体を作らねばならない。この段階はプロジェクトFとなんら変わらない。しかし、問題は機械のチューンナップなのだよ。確かに機械装甲の部分を強く、軽くすれば大抵の攻撃には傷つかずにすむだろう。しかし、このままでは生身が機械に耐え切れずに魔力に頼るだけの戦闘機人を造ることしか出来ない」

研究員「もういっそのこと全身を機械にしてしまえばいいのでは？」

研究員「「それだ！！」」

『それだ！！じゃねーよ！つーかお前ら手に持ってるフィギュアはなんだ！ロボット造りたいだけだろ！』

ジェイル「それが1番手っ取り早いのだがね、スポンサーはあくまでも半人半機を所望しているのだよ」

オタ研究員「「そ、そんな！我々の〇．T．フィールド計画が！」」

『この世界にもガンダ〇とか〇ヴァあんの！？』

ジェイル「A．〇．フィールドがなにかは知らないが対魔力フィールドは可だよ」

A．T．フィ〇ルドは誰にも侵されたくない心の領域ですよジェイさん

そもそもあのフィールドは魔力も防げるのか不思議なんだけど……
…あぁ、ここの連中なら普通に魔改造したA．T．フィール〇造れそうだな……

ジェイル「なんで遠い目をしているのだね無人君。君の意見を聞きたいのだが」

『どーせ魔力AA以上の造るんだから魔力で肉体を強化する機関を造ればいいんじゃないですか？』

ジェイル「……」

研究員「「……」」

え？なんで皆ぽかーんとして俺を見てんの？俺なんかした？

ジェイル「……ふ、ふふふふふ！！」

『うわっ、不気味すぎる』

しかも無駄に右手で顔を隠してるからナルシストっぽいですよジェイさん。悪逆皇帝にでも目覚めたのか？

ジェイル「ふ、ふふ、ふはははははははははははははははは
ははははははははは！！そうだ！それだよ無人君！何故それを思

いつかなかったのだろうね！！ここの研究員達は！自動で付与魔法（エンチャント）をかける機関を造ればいいのだ！！」

なにさりげなく自分は違うみたいな雰囲気だしてんのこの人？

とりあえず高笑いが止まりそうにないジェイさんはほっといて真面目な研究員の人と話すことにしよう

研究員「後は戦闘機人に適した遺伝子と受精卵が必要ですね」

『培養液の中でどれだけ人間の形を作れて戦闘機人化にも適合できるようにしなければならないですからね』

ただ何兆を越える遺伝子から適合する遺伝子を見つけるのに何年かかるか……考えたくないな

研究員「クローンを造るわけにはいきませんが、プロジェクトFATEの記憶の複製転写技術で赤子の脳シナプスネットワーク（誕生二ヶ月前から二歳程度までにある）に干渉し、特定の人物の記憶を素体に転写して生まれた瞬間に自立可能にしなければいけませんね」

『教える時間がもったいないですからね』

……やっぱり成功体完成までに3年はかかるんじゃないか？

まぁ、そんなこんなで高笑いするジェイさんをほっといて優秀なスタッフ達と研究に勤しんだ

〜閑話〜

オタ研究員「武装にファン〇ルをつけていいかな？」

『却下！』

女性研究員「はぁはぁ……無人君、ちょっとこっちに来てくれない？怖くないから」

『うわあぁあぁぁ！！』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6910z/

戦闘機人TYPE1st

2011年12月24日11時48分発行